

信仰の出発点

(イザヤ 55:1, 2
マルコ 5:25-34)

今日の一つの物語を通して、わたしたちの信仰とは何か、主イエス・キリストを通して示して下さった福音とは何かについて考えてみたいと思います。

今イエス様は危篤に陥っている会堂長ヤイロの娘を助けるために向かっているところでした。そのイエス様のところに大勢の群衆が押し迫ってきたと聖書には書かれています。イエス様が悪霊を追い出し、病気を癒すといううわさを聞いて、どうか自分の病気を治してもらおうと切実な思いで来た人もいます。そして、イエス様が五千人に食べ物を与えたことを聞き、なにか食べ物を得るのではないかという思いで近づいていた人もいたかもしれませんし、あるいは、イエス様の言葉に引かれ、何か深い教えを得たいという気持ちで、イエス様に従った人もいたと思われます。あるいは、死にそうになった少女をイエスという人がどのようにするのか、半分好奇心で着いて来た人もいたでしょう。

病気で死んでいく少女の父である会堂長ヤイロは焦る気持ちでイエス様の足を急がせていたでしょう。そのようなところに一人の女の人が登場します。彼女は出血の止まらない病気をもっていました。これは婦人特有の病気で、子宮の異状によって出血が続いて流れる病気でした。そのような病気が十二年間も続いていました。十二年での十二という数字は、ユダヤ人にとっては完全数を意味することで、長い時間、もう耐えられないくらい十分な時間を苦しんできたという意味もあるのです。

26節をみると、多くの医者にかかって全財産を使い果たしましたが、何の役にも立たなかったと書かれています。その長年の苦しみとそこからくる貧しさで彼女は、外面からも惨めさが表れていたかもしれません。特にモーセの律法によると、その病気を持っている人は不正な者であったのです。レビ記 15章 25節以下をみると詳しく書かれています。

そのような病気をもっている彼女は汚れた者であり、他の人に接触をすると、接触された人も汚れるのです。それで、人たちを避けて離れて生活をしなければならなかったのです。ですから、神殿に入ることもできないし、勿論礼拝を守ることもできなかったのだと思います。当時の人々はそのような病気は罪の結果であるという思いがありました。彼女は神様からの慰めも憐れみも乞うこともできない、呪われた者になっていたのです。そのような生活が十二年間も続きました。たぶん、そのような苦しみと孤独で彼女は心まで歪んでいたのかもしれませんが。人々から痛み付けられ、恨む気持ちさえ持っていたのかもしれませんが。死にたくなるような絶望の生活であったのだと思います。

そのような彼女の耳にイエス様の話が入りました。不思議な力をもっていてどのような病気も治すといううわさを聞いたようです。多くの医者に失望し、もう諦めたような彼女の心にその話は希望になりました。それで、勇気を持って、群衆に囲まれて足を急いでいるイエス様に近づきました。イエス様の周囲にいる多くの人たちに紛れ込み、その中を割り込んで、イエス様に近付き、その服に触れようと思いました。なぜなら「この方の服にでも触れれば癒していただける」と思ったからでした。

彼女はイエス様がどのような方であるのか、どのような姿をしているのかについては関心がありません。この不思議な力を持っている方に対する何の関心もないのです。イエス様がどのようなことをおっ

しゃるか、どうか話をしてみたいという思いもないのです。ただ、自分の病気を癒してくれるイエスの服に関心があるだけです。静かにお互いが分からず、他の人も分からないようにして、ひそかに自分の病気だけ癒してもらえばよいのです。イエスの不思議な力が服を通して伝達され、自分が癒されるという思いでイエス様に近づいたのです。キリスト教的に言えば、彼女のこのような接近は信仰的な態度ではないのです。迷信的な考えです。

彼女はナザレのイエスがどのような方であるかも知りません。知ろうともしませんでした。イエス様に対する好奇心さえないのです。ただ、病気を癒す不思議な力があるということだけが彼女にしてこのような行動を起こさせたのです。魔術のようにある物体に触れるような気持ちでイエス様に近づきました。後ろから静かに、病気だけ治してもらえばよいのです。イエス様を知る必要も、自分を知らせる必要もなく、かえって知られるのを恐れながら、怯える気持ちでイエス様の服を触ろうとひそかに近づきました。

私たちの信仰から言えば、この女の人は間違っていました。自分の願いを適うためにイエス様に接近し、そして、願った通りになりました。イエス様の服にひそかに触れ、そのとき、出血が全く止まって病気が癒されたことを体に感じました。それですべてはうまく行ったように見えます。

そのときでした。イエス様は群衆の中を振り返り、「私の服に触れたのは誰か」と言われました。目的を達成し、静かにイエス様から離れ去ろうとした彼女はイエス様と対面して自分が何をしたのかを、大勢の人の前で言わなければならなくなりました。

多くの群衆に囲まれ、道を急いでいたイエス様、休む暇もないくらい押し寄ってくる人たちの騒ぎと忙しさの中でも、イエス様はこのひそかな行為を感じ取ったのでした。弟子たちは言います。「群衆があなたに押し迫ってくるのがお分かりでしょう。それなのに『だれがわたしにふれたのか』とおっしゃるのですか」。そのような状況の中でも主イエスはこの婦人に気づいたのです。

彼女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのままに話しました。汚れた者、また、他の人を汚すもの、その人は人々を避けなければならないのに人々の中に入り、自らイエス様に近き、イエス様に手を触れたのです。それは何を意味するのでしょうか。自分の病気をイエス様に移したのです。自分の病気が治ったということはその病気がイエス様に移ったということを意味します。当時、考えられないこの大きな罪、卑劣な行為を人々の前で、告白しなければならなくなりました。病気を治すところか、人々の石に殴られ、死んでしまうかもしれない状況に立たされてしまったのです。

しかし、恐れで震え怯えている彼女にイエス様は言われます。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心していきなさい。もうその病気にかからず、元気に暮しなさい。」主イエスはこの惨めな婦人を「娘よ」と呼んでいます。

イエス様は、なぜこのようにやってはいけないことをしたのか、と問うていません。なぜ、このように卑劣な行為をしたのか、と怒ってもおられないのです。また、あなたのその信仰は迷信的で間違っているともおっしゃっていないのです。彼女の魔術的な思いも含めて、その卑劣な行為も含めて、彼女を包み受け入れてくださったのです。また、イエス様に対する無知と自己中心的な考えで接近した彼女に「その信仰があなたを救った」とおっしゃっているのです。

その信仰とは何でしょうか。彼女はどのような信仰を持っていたのでしょうか。

彼女は自分の苦しみ、問題をイエス様に転嫁したのです。自分が治るためにイエス様を自分が味わった暗い人生の中に引き降ろしたのです。イエス様に自分の重い荷物を背負わせ、今までの不幸な自分の人生にイエス様を引き寄せました。彼女は無意識の中で、イエス様の十字架を指していたのです。私たちの病とのろい、罪を背負ったイエス様を指していたのです。私たちのために十字架を負ったイエス様の福音の真理を示していたのです。私の苦しみ、病、絶望を主に背負わせる、わからないうちにその十字架の信仰、その福音の神秘をつかんだのでした。

主イエスは汚れた者とみなされていた、たいした存在でもない一人の女の人を心に留め、忙しさの中で足を止めてくださったのです、そして、彼女の間違った思い、してはいけない行動、すべてを受け入れ、救いの道を開いてくださいました。

「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らさなさい」そのようなイエス様の話を聞いてその場を去った彼女の心には、イエス様のその話と眼差しが胸の中に深く刻まれたのに違いありません。病気だけ治してもらおうとした彼女の心には、主イエスの存在が大きな慰めと感動となっていていつまでも響いていたということは想像できるものです。病気だけではなく、心も魂も癒され、新しい人生になったのです。

わたしたちが教会に来たきっかけはそれぞれ違います。信仰とは何かを理解することができなくても、キリスト教に対する正しい知識がなくてもよいのです。とにかく主イエスに近づくこと、神頼みのような思いであっても、イエス様を通して何かをかなえたいという思いで教会の門をくぐったとしても、どのようなことであれ、それが信仰の出発点なのです。自己中心の間違った思いで主に近づいたとしても、つまり、人間的な思いで教会に来たとしても、主はその人を受け入れ、信仰とは何かを知るように導いてくださるのです。

イザヤ預言者は言います。「渴きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め、価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。(イザヤ 55:1)」

どのような理由であれ、渴きを覚え、主のもとに来る人を主はそのまま帰らすことはなさらないのです。それは主が招く福音の世界、神様の愛に満ちている神秘の世界へと導かれる出発点になるのです。